

合唱組曲「北九州」の誕生秘話



元教育委員会文化課指導主事

末次寛八



團伊玖磨氏と筆者

1 「合唱曲制作への想い」

昭和38年、当時私は戸畑中学校の音楽教師のかたわら、TNC放送児童合唱団、北九州混声合唱団の指導をしていた。TNCテレビ西日本(当時は八幡東区西本町に本社があった)の練習会場へ行く途中、ある週刊誌の中の「北九州は文化不毛の地」という活字が目に入った。その理由についての記述があったが、詳しい内容は記憶にない。ただ、文化不毛の地ということだけが、頭に残っていた。北九州には、数多くの合唱団があり、吹奏楽団もある。また、アマチュアながら交響楽団もあり、それぞれが活動している。なぜ不毛といえるのか、不思議に思えてならなかった。

昭和43年に、團伊玖磨先生作曲の、合唱組曲「筑後川」が発表された。こんな合唱曲が、北九州にもあったらと、羨ましい気持ちがこみ上げてきた。北九州が文化不毛の地から脱皮するには、創造が必要ではなからうか。現在、私は北九州混声合唱団を指導している。この合唱団を中心にして、新しい合唱曲を作れないだろうかと思った。題材は、北九州を取り上げれば、自分達の合唱曲になるし、北九州の曲にもなると思った。

構想も題材も、頭の中を巡るだけで、何のまとまりも、形もないままだが、意図だけでも、北九州交響楽団の定期演奏会に、客演指導者として、度々来北されておられた團先生に話してみようと思った。北九州交響楽団と私の指導していたTNC放送児童合唱団は、当時、同じテレビ西日本のスタジオを練習会場にしていた。その縁から、何となく、交響楽団関係者と顔見知りになっており、練習が終わると、團先生や交響楽団の関係者と小倉の街に出かけ大いに飲んだものである。

私は、合唱曲の構想を語り、もし機が熟したときには、作曲していただけるか、打診してみた。團先生は「私でよければ、喜んで作りますよ」と、快諾してくださった。しかし、構想もまとまってないし、内容も漠然としている。團先生は、「内容がまとまったら、また、相談しましょう」と笑っておられた。合唱曲制作に少し明かりが灯ったように思えた。

2 「夢から現実へ」

昭和45年、当時教育委員会社会教育部文化課が中心になって、北九州市民音楽祭を実施していた。この市民音楽祭をきっかけに、音楽的なイベントを充実するため、文化課に音楽専門家が必要になった。昭和49年4月から、私は、この文化課の指導主事として、勤務するようになり、これまでの学校教育の音楽から、社会教育の音楽へと方向転換した。これまで私は、北九州混声合唱団や、児童合唱団の指導を手掛けてきていたので、これまでのように、学校教育の音楽が基本となり、その成果が社会環境の中に延長されればと考えていた。そして本格的に市民音楽祭の計画を立案するうちに、一時中断していた合唱曲制作の構想が、たちまち蘇ってきた。

その年市職員に対し、行事や事務内容、その他市政に関する提案募集があった。当時の係長の勧めもあり、私も提案募集に応募することにした。提案するためには、自分の構想をまとめ、提案理由を形にしなければならない。構想内容を思いつくままに羅列してみた。北九州市は、旧5市が合併して誕生したので、旧5市の歴史と文化がある。しかし、北九州全体をふるさとと捉え、郷土の自然環境、生活習慣、歴史的風土、これらを夢と希望で歌いあげる。そして、北九州の音楽的財産として残したい。また、式典曲としても、活用出来るものになりたい。これらの内容を、網羅する音楽形態を、交声曲としてまとめてはどうかと思った。交声曲とは、独唱、重唱、女声合唱、男声合唱、混声合唱、児童合唱、それをオーケストラで伴奏する、大規模な声楽曲のことである。これで、北九州の音楽文化が創造できる。新しいも

のができる。この交声曲を、創作することにより、郷土愛とともに精神的にも、市民の文化活動が根付いていこうと確信し、気持ちが高ぶってきた。

数日して、市長の前で、提案内容を説明する機会が与えられた。最初に谷市長が、「交声曲とは、どんなものですか」「作詞者は北九州在住の人ですか」など矢継ぎ早に質問をされた。最後に市長は、「作曲は、團伊玖磨氏とあるが、團先生は作曲してくれるだろうか」とつぶやかれた。これまでの、團先生の国内は勿論世界的にも有名な、実績や活動については、かなりの知識を持っておられたのであろう。そのような有名な先生が、果たして、北九州市のために、作曲を承諾してくれるのか、懸念されておられたようであった。この時は、既に私と團先生の間で交わされていた約束については、口をつぐんでいた。

私は、さっそく團先生に、これまでの経過や、結果を報告した。團先生は、交声曲の形態には、懸念を示された。「交声曲となれば、5年に1度か、10年に1度の演奏しかできない大曲になるよ。そうすると、北九州の団体がいつでも演奏できるものではなく、市民のものとなって、広まることは不可能でしょう。それよりも、合唱組曲の規模にして、市民団体が手軽に、中身を選択して、演奏できるようにすれば、市民に親しまれるのではないだろうか。それでこそ、歌い継ぐには、最良のものでしょう」との意見だった。私は、この曲を歌い継いでいくことこそ一番大切なことだと思い、そして曲名も合唱組曲「北九州」と命名しようと決心した。

「力強さ、歌いあげる



小倉祇園も盛り込み
全九章 四十分の大作

「北九州」の完成
「北九州」の完成、北九州市民音楽祭の会場に、北九州交響楽団が演奏した。この曲は、北九州の音楽文化を創造できる。新しいものができる。この曲を歌い継いでいくことこそ一番大切なことだと思い、そして曲名も合唱組曲「北九州」と命名しようと決心した。

昭和52年12月1日付毎日新聞から(毎日新聞社提供)

3 「誰に作詞をお願いするか」

團先生が、組曲制作の打ち合わせで来北された。その機会を捉え、北九州文化連盟の会長をなさっていた横山白虹先生にも同席していただき、作詞者の選考について検討した。作詞者の候補として、地元の方が数名あげられた。議論の中で、作詞を地元の作家に依頼すれば、どんなに立派な詩が出来ても正当な評価をされず、足の引っ張り合いになるのではないか。だから、北九州に縁りのある作家に依頼してはどうかという意見が出た。このことに配慮しながら、更に人選が進んだ。

あれこれ候補者が挙がる中で、これまで全く名前の出なかった、栗原一登先生の名前を、ふと横山先生がつぶやかれた。栗原先生は、小倉師範学校の卒業である。私達3人は顔を見合わせた。思わずあの栗原先生の長髪の顔が浮かんだ。私が大学卒業後赴任した附属小学校では、毎年、研究発表会を開催していた。当時栗原先生は、劇作家としてこの会に出席されていた。この時が私と栗原先生との最初の出会いであった。

また、栗原先生は、師範学校を卒業後、八幡の枝光で、小学校の教員をなさっていたことがあった。そのせいか、北九州をこよなく愛しておられた。特に憧れていたのが、平尾台であった。羊群台地の景観をいつまでも眺め、自分が死んだら、あそこに墓を建てたいと漏らしていたほどである。戸籍も八幡西区に置いたままであり、これを東京に移すと、北九州との縁が切れた気がする、ともおっしゃっていた。これほど北九州を思い、北九州の気質をふんだんに秘めた先生であれば、きっと素晴らしい、北九州の詩ができるだろう、と私の胸は熱くなった。私は、さっそく栗原先生に電話を入れた。合唱組曲の構想を説明しながら、作詞を依頼した。栗原先生は、「北九州はやるねえ、少年のように心が躍るよ」と、電話口の向こうから、弾んだ声が跳ね返ってきた。栗原先生は、劇作家の立場から、すぐさま北九州の舞台構想が、閃いたようである。

栗原先生は、作詞の構想を練るため、たびたび来北され、私も常にこれに同行した。平尾台に登り、遥かに広がる羊群台地の景観を歩いたり、船上から洞海湾を眺めたりした。また、小倉祇園太鼓の祭りの日にも訪れ、祭りを丸ごと自分のものにして帰られた。そして、昭和52年2月に作詞が完成し、私の手元に原稿が送られてきた。北九州を愛して止まない、栗原先生の思いが新鮮に書かれていた。

私は、1ヶ月が過ぎた頃、もう一度詩を読み返してみた。ふと、何か足りないと思った。何が不足しているのか。序章のふるさと賛歌あり、関門海峡あり、5市の生活あり、山あり、海あり、祭りもある。その時、あつと思った。平尾台がない。あれほど愛した平尾台がないのである。私はすぐさま、栗原先生に電話を入れた。「あっ、忘れとった」と、驚きの声が返ってきた。「寛ちゃん、有り難う。すぐ作るよ、有り難う」と何度も礼を言っておられた。こうして、最後に出たのが、「平尾台断章一石の羊」である。

4

「團先生の苦悩」

栗原先生が作られた詩の内容は文句のつけようがなかった。しかし、口語文あり、文語文あり、しかも行数が不揃いの文章構成だったので、作曲しにくいのでないかと思った。さっそく團先生に詩を送付し、意見を求めた。團先生は検討してみようとおっしゃったままであった。私は、作曲しやすいように作り替えようと思い、その文章構成のことを栗原先生に連絡した。栗原先生は、「作曲がしにくければ、作りやすいように変えても構わないよ」とおっしゃられた。私は、すぐに字数を揃える作業に取り掛かった。1ヶ月後に補作が出来たので送ります」といって、「主人は、もう作曲を始めていますよ」とのことであった。詩はどうされたのか聞くと、そのまま作曲されているとのことであった。團先生は、作詞者の意図と語感を大切にしたのである。かなり、苦勞されることだろうと思った。

7月頃に、合唱曲の楽譜が團先生から送られてきた。さっそく私は合唱譜の作成に取り掛かった。オーケストラの伴奏がまだ出来ていないので、どんな前奏があるのか、どんな間奏になるのか、全くわからなかった。ただ合唱部分の練習に終始していた。しかし、新鮮な旋律を歌う喜びは感じられた。私は序章のメロディを文化課の職員に教え、飲み会があるたびに全員で歌ったものである。

12月初旬であったろうか。團先生から、オーケストラの前半の楽譜を送ったとの電話があった。やっとオーケストラの練習が始められる。いよいよ最後の努力であると、感激で胸が膨らんだ。さっそく私は、最初に届いた前半のパート譜を書き換え始めた。急がなければ時間が足りない。朝から文化課の机で一日中楽譜書きに明け暮れた。勤務が終わると自宅に持ち帰り、また書き続けた。



5

「合唱団員の募集」

昭和52年5月に、組曲を歌うための合唱団員を募集した。広く市民に呼びかけ、作曲の完成と同時に、練習できるように、早めに準備した。

しかし、ただ興味本位だけで、参加してくれたのでは、優れた最高の表現にはほど遠いものになる嫌いが考えられる。そこで、合唱連盟北九州支部に参加の要請をした。北九州の歌ができるので、合唱連盟はこぞって参加してくれるものとばかり思っていたのだが、そんな甘い考えは通用しなかった。各合唱団は、それぞれの活動があり、合唱祭、合唱コンクール、合唱講習会等の年間行事も予定されていた。それを中止してまで、行政の事業に協力しなければならないのかという、憤りさえ表した不満の意見が大半を占めていた。

私は合唱団あがりの参加が不可能であれば、個人で参加して欲しい。北九州の合唱曲が出来るのだから、北九州の合唱人口の力を集結してほしいと、熱く呼びかけた。合唱連盟の責任者も「これまでにない行政の計画です。北九州の市民として参加できるよう各合唱団で検討して欲しい」と更に説得を続けてくれた。この説得が大きな力となって、協力体制がまとまったのである。

高らかに 初練習

市制十五周年の
合唱組曲「北九州」



敬しい表情で合唱組曲「北九州」の練習を指揮する團氏（前編）

團さん指揮で
オーケストラ

昭和52年12月23日付朝日新聞から

6

「練習のはじまり」

12月22日、戸畑市民会館の小ホールで、團先生の指導による、待ちに待った交響楽団の初練習が始まった。初めて形になった序章のオーケストラのハーモニーに身震いした。これが合唱組曲「北九州」の響きだ、雄大な北九州がここにあると、思わずにはいられなかった。何と心地よい音であろうか、組曲に寄せる気持ちが更に膨らんでいった。

團先生の指導で、合唱団の練習がさらに重ねられた。この合同練習には、栗原先生もわざわざ来られて、練習を熱心に聞いておられた。自分の詩が、どのような声で歌われるのか、どんなハーモニーで包まれるのか、大きな関心と、興味を持っておられたようだ。栗原先生は、私に、「寛ちゃんも大変だね、合唱団員が立ったまま、2時間近く練習するのに、あんたも、側で立ったまま、ご苦勞さんだね」と労ってくださいました。

私の仕事は、合唱団の各パートのバランスを注意深く聞くことと、演奏時間を計測することである。現在の団員数では、男声の音量が薄く感じられるため、もっと増やす必要があった。そこで団員の責任者の方に、男声のパートを充実するように頼んだところ、市内の男声合唱団員に参加を呼びかけて、

集める努力をしてくれた。この献身的な協力には、感謝の気持ちでいっぱいであった。この合唱組曲の演奏会を成功させるために、多くの人が立場こそ違え、いろいろな形で関わりながら、努力している姿を見ると、その情熱と気概がひしひしと感じられた。

合唱練習には、谷市長夫妻も、聞きに来られていた。谷市長は練習の途中で、私を呼び、ここは、違うんじゃないかと、歌詞の部分指摘された。そこは「IV 九州の山は」の部分の「沖の藍島、腹かいち」というくだりである。「今、聞いていると、藍島をあいじまと歌っていたが、あれは、あいじまとは言わないよ。藍島の人が聞いたら、腹を立てるよ」とおっしゃった。しかし私は、あいのしまでは、音符に、割り付けがしにくい。さて、どうしたものかと考え込んでしまった。谷市長は「あいしまなら、許されるよ」と、アドバイスして下さった。私はすぐ、團先生にその理由を説明し、藍島を、「あいじま」ではなく、「あいのしま」に変えようということになった。私は市長がここまで熱心に、しかも、注意深く聞いていただいているとは思わなかった。市長として、地名に対する思いを寄せた心配りには、本当に頭が下がった。

7 「様々な困難を乗り越えて」

オーケストラの練習は、常に問題を抱えていた。北九州交響楽団は、市内のアマチュアのメンバーで組織されているので、楽器編成に応じた定員が確保出来ていなかった。オーケストラの編成が、2管編成とか3管編成になると、それに見合うだけの弦楽器はどうか確保できるが、管楽器となるとそうはいかない。クラリネットが4本、ホルンが3本といった要求があると、楽器奏者が不足するのである。それを補うために、他の吹奏楽団から客員演奏者を依頼しなければならなかった。

團先生から練習中にこの客演についての指摘があった。團先生は、クラリネット奏者を見て、「君はこの前の人と違うけれど、この次の練習には参加できるの？」と尋ねた。奏者は「いいえ」と答えた。これは練習日程に合わせて、客演を集めているため、楽器数だけは充足したものの、奏者は異なっていたからである。「これでは、練習を重ねる意味がないよ、また、初めから練習しなければならない。そうでしょ。末次さん！」と大きな声を出された。私は交響楽団のお家の事情が分かるだけに、無言のまま下を向いていた。しかし、練習は続行しなければならないので、出来るだけ練習に参加可能なメンバーを確保しながら、練習は進められた。

この組曲には、「祭りー太鼓祇園」の章があり、小倉祇園太鼓の共演が必要不可欠であった。この出演は、いろいろと協議した結果、大門の木村重男さんをお願いしようということになった。木村さんは最初、オーケストラとの共演に躊躇されていたようであったが、「まあ、やってみましょう」と承知してくれた。しかしながら、オーケストラと初めて共演した時は、戸惑いがちで團先生の指揮が飲み込めていなかったようであった。團先生も太鼓の音をどの程度延ばすか、どこで切ればいいのか、そのタイミングに困られていたようであった。何度も何度も練習を繰り返したが、太鼓のリズムとオーケストラのテンポとは異質なもので、全く合わない。團先生は頭を抱え、考え込んでしまった。指揮者の合図を待つ木村さんの目も真剣になっている。團先生の左手がさっと振り下ろされた。「ア、ヤッサヤレヤレ、ア、ヤッサヤレヤレ」何と木村さんの口から、掛け声が飛び出した。これをきっかけに、太鼓の打ち手が活気づく。ジャンガラのテンポが遠くなるにつれ、太鼓の音も躍動し始めた。これにかぶせるように、オーケストラの演奏が乗ってくる。あの、無法松の一生のテーマ旋律が流れる。と同時に、團先生の左手が、太鼓の音を停止させる。オーケストラの演奏は流

れていた。成功である。指揮者もそしてオーケストラの団員も大きな拍手を送った。太鼓の打ち手とジャンガラ奏者の心をひとつにする重要な鍵が、あの掛け声にあったのである。

ところで、「ア、ヤッサヤレヤレ、ア、ヤッサヤレヤレ。関の先帝、小倉の祇園、雨が降らねば、金が降る」の文句について、文化課の主任から問題点を指摘された。あの掛け声は、阿南哲郎先生が作詞されたもので著作権があるというのである。私はてっきり、昔から祇園祭りとともに、伝承されたものだから思い込んでいた。そうであれば、阿南先生の許可が必要になる。しかし、阿南先生は既にお亡くなりになっていた。そこで奥さんに電話を入れお願いした。奥さんは、「そんなことであれば、いつでも使ってください。あの文句が広がれば、阿南もきっと喜んでくれると思います」と快諾して下さった。

これで全てが解決したのである。いろいろと思わぬハプニングが飛び出し、その都度多くの関係者の方々に、ご理解いただき、ご協力していただいたお陰である。ひたすらに感謝の気持ちで一杯になった。これだけ多くの人達に支えられ、困難を克服してきた。この組曲の発表会は、きっと成功するに違いない、と確信した。

歌い上げた15歳のふるさと
「合唱組曲・北九州」発表会



昭和53年2月5日付毎日新聞から(毎日新聞社提供)



8 「演奏会の当日」

演奏会会場の小倉市民会館前には、入場整理券を手にした聴衆が、入り口から裏の事務室まで並んでいた。合唱組曲「北九州」への、期待と興味を持った北九州市民である。開場と同時に、階下から階上へと満席になった。舞台上や客席の中央には、テレビも既にスタンバイを完了している。

私は、舞台下手に位置し、第1ベルの指示を出した。客席の照明を落とすと、ざわめいていた客席全体が、緊張に包まれた。本ベルの指示。舞台下手に立つ指揮者、團先生の入場である。私は、團先生の後ろに立ち、背中をドーンと叩いて、ステージへ押し出した。

これまで、私の仕事をご理解いただき、ご協力して下さった谷伍平市長。具体的な仕事を遂行してくれた文化課のスタッフの各位。そして何よりも、この演奏会に参加していただいた各団体の多くの皆さんに対し、本当に心から感謝の気持ちで、思わず目頭が熱くなってきた。

合唱組曲「北九州」は、立派に成功したのである。興奮さめやらぬなか、團先生、栗原先生と私の3人はホテルに帰り、一緒に飲んでた。それぞれの思いで、口もきけなかった。その時、電話がかかってきた。團先生が出られたと思うが、横山白虹先生が紺屋町の「麓」で飲んでいるので出てこいと言っているとのことであった。私たち3人は互いに顔を見合わせた。「行こう」3人の気持ちが一一致したのである。3人は寒い夜風に襟を立て、横山先生が待っている「麓」に急いだ。



楽道

この組曲には、「祭りー太鼓祇園」の章があり、小倉祇園太鼓の共演が必要不可欠であった。この出演は、いろいろと協議した結果、大門の木村重男さんをお願いしようということになった。木村さんは最初、オーケストラとの共演に躊躇されていたようであったが、「まあ、やってみましょう」と承知してくれた。しかしながら、オーケストラと初めて共演した時は、戸惑いがちで團先生の指揮が飲み込めていなかったようであった。團先生も太鼓の音をどの程度延ばすか、どこで切ればいいのか、そのタイミングに困られていたようであった。何度も何度も練習を繰り返したが、太鼓のリズムとオーケストラのテンポとは異質なもので、全く合わない。團先生は頭を抱え、考え込んでしまった。指揮者の合図を待つ木村さんの目も真剣になっている。團先生の左手がさっと振り下ろされた。「ア、ヤッサヤレヤレ、ア、ヤッサヤレヤレ」何と木村さんの口から、掛け声が飛び出した。これをきっかけに、太鼓の打ち手が活気づく。ジャンガラのテンポが遠くなるにつれ、太鼓の音も躍動し始めた。これにかぶせるように、オーケストラの演奏が乗ってくる。あの、無法松の一生のテーマ旋律が流れる。と同時に、團先生の左手が、太鼓の音を停止させる。オーケストラの演奏は流

昭和53年2月7日付読売新聞から
(著作権 読売新聞西部本社)

市政だより(昭和53年2月15日号)